

I

- 私は常に真理を言います。しかし、すべての真理ではありません。なぜなら、真理をすべて言うことはできないからです。真理をすべて言うこと、それは物理的に不可能です。言葉が足りないのです。まさにこの不可能なものによってこそ、真理は現実界に繋がります。 S(A)

ですから白状しますと、私はこのコメディーに応えようとしたのですが、それはくずかごに行くべきなのです。

だから失敗しているわけですが、それでこそ間違いという観点からは成功なのです。いやむしろさまようこと¹²という観点からは成功だと言った方がよいでしょう。 a

このさまようことは、たまたま出てきた問題であって、あまり重要ではありません。しかし、どのようなさまよいなのでしょうか。 S2

さまようこととは、愚かな者に私を理解させるために語るのだというあの考えからできあがっています。

この考えは当然ほとんど私の関心を惹かなかったので、それは私に暗に示唆されるだけでした。それも友情から。それが危険なのです。 S1->S2

なぜなら、テレビと、私が長い間語りかけてきた聴衆、セミナーと呼ばれるものの

- 1 -

あいだには違いはないからです。どちらの場合にもひとつのまなざしがあり、どちらの場合にも、私は、そのまなざしに向かってではなく、まなざしの名のもとで語るのです。 a<>S

とはいえ、わたしがそこで独り言のように¹³ *à la cantonade* 語っているのだと思っていただきたくはありません。私は問題に通じている人たち、愚かではない人たち、分析家と想定される人たちに向かって語るのです。

経験からすると、私の周りに群がってやって来る人たちだけをみても、私の言うことは、私が何らかの理由で分析家だと想定する人たちよりもはるかに多い人々の関心を惹いているようです。となると、私がここでセミナーにおけるものとは違う調子で語る理由がどこにあるのでしょうか。

それに加えて、ここでも私が、私に耳を傾けてくれるような分析家たちを想定しても、不思議ではありません。

さらにつっこんで話すと、私が分析家と想定する者に期待するのは、あの対象となることのみで、分析家が対象となるからこそ、私が教えることは自己分析とは異なるのです。おそらくこの点について、私は、私を聴いている人たちからしか理解されないでしょう。しかし、何も理解しなくても、分析家は私がいま述べた役割を果たしており、そうするとテレビも同じようにその役割を果たすわけです。

つけ加えれば、対象 - 分析主体の対象 - であることではじめて分析家であるこれらの分析家たちに、時として私は訴えかけることがあります。彼らに語るためではなく、彼らについて語るためです。単に彼らを困惑させるだけであってでもです。たしかにそうかもしれません。私の訴え

- 2 -

は暗示効果を与えることもありえるのです。

本当でしょうか。暗示では何もできない場合があります。それは分析家が他者から、つまり彼を「パス」まで連れて行った者から、欠如を手に入れる場合です。それは私の言うパスで、自らを分析家として定めるためのパスです。未完成の養成にたいする虚構のパスの場合は幸せです。それは希望を残すからです。

II

- ラカン博士、私はここで先生とエスプリを競い合うためではなく・・・ただ、先生に返答していただくためにここにいるのだと思います。だから、私はごくささやかな - 基本的な、通俗的でさえある - 質問に限定します。私が出す質問はこうです - 「無意識とはおかしなことばですね」。

- フロイトはそれ以上のものを見いださなかったし、それについてとやかく言うことはありません。この言葉の不都合は、否定形だということで、他のことはともかく、それによってありとあらゆるものをこの言葉に想定することができるからです。それでもいいのではないのでしょうか。感知されないものに対して、「どこにもない」と言っても、「いたるところにある」と言っても同じことです。

とはいえ、それは大変明確なものです。

無意識があるのは語る存在においてだけです。他の諸存在においては - それらが存在を持つ 「無意識の条件、

- 3 -

のは、それらが現実界によって重きをなすとしても、命名されることのみによるのです - 本能とそれは言語であるもの、つまりそれらの生存が懸かっている知があります。ただ、それもわれわれの思考にとる」・・・

っての話であって、あるいは、そこで思考は不適切なものかもしれません。

人間を必要とする動物、そのために家畜 [d'hommes] と呼ばれる動物たちもいます。それらはこの理由で、ただ非常に短いものですが、無意識の激震に貫かれるのです。

「無意識、それは語る」、このことは無意識を言語に依存させるのですが、言語についてはほとんど知られていません。言語学の名のもとに、これまでなかったものですが、人間に介入し・・・「言語はラ

ようとするものを総称するために、私が言語学もどき [linguiterie⁵] と呼ぶものがあるにもかかん

らなく知らないのです。言語学はララング [lalangue⁶] を扱う科学だからであって、他のあらゆる

科学でもなされるように、私はララングとして、言語学の対象を特性化するひとつの語で記す

のです。

この対象というのは、しかしながら、卓越したものです。なぜなら、主体というアリストテ

レス的概念⁷ そのものが、他の何にもまして正当に、この対象に還元されるからです。このこと 分析的仮説。

は、無意識を、魂に対するもうひとつの主体の「外 - 在 [ex-sistance⁸]」によって設定することを

許してくれます。ここで魂とは、身体への主体の機能の総体という想定としての魂です。この魂

は、アリストテレスからユクスキュル⁹ にいたるまで声をひとつにして語られ、望もうと望むま i(a)

いと生物学者たちがいまだに想定し続けているものであるにもかかわらず、いっそう疑わしいも

のです。

じっさい、無意識の主体は身体を通して、身体に思考を導入することによって始めて魂に触 思考は魂 - 身体

- 4 -

れるのであって、この点ではアリストテレスを否定しています。人間は、この「哲学者」が想像にたいして外 - 在するように、魂で考えるものではありません。の関係しかもたな

人間はひとつの構造、つまり言語の構造、 - 構造とは言語を意味するのですが - この構造がい。身体を分断することによって思考するのであり、そしてこの身体は解剖学とは何の関係もありません。ヒステリー者がそれを証明してくれます。構造という裁断機が魂にやってくると強迫症状が生ずるのであって、強迫症状とは魂が持てあまし、魂を途方に暮れさせる思考なのです。

魂にかんして、思考は不調和です。ギリシャ語のヌース []は思考の魂への迎合の神話であって、この迎合は世界、魂が責任を持っている世界（環境世界 [Umwelt]）に適ったものなのでしょうが、じつは、この世界は思考を支えるファンタズムでしかありません。それもひ現実が現実界からとつ「現実」には違いないかもしれませんが、現実界のしかめ面として理解されるべき現実で引き継いでいる僅す。かなもの。

- それでもなお、先生がファンタズムに帰着させるこの世界において、ひとは良くなるために、精神分析家であるあなたを訪れます。治癒というの、やはりファンタズムなのでしょう。

- 治癒とは、苦しんでいる人、自らの身体や思考のために苦しむ人から出されるひとつの要請です。驚くべきことに、それには返答があり、いつの世にも医学は言葉を使つて的を射た返答言葉の威力をしてきました。

無意識が発見される前はどうかだったのでしょうか。ひとつの実践の遂行においてそれが解明

- 5 -

される必要はないというのが、いま言ったことから帰結されます。

- それでは、分析は「解明される」ということによってのみで治療と区別されるのでしょうか。先生のおっしゃりたいのはそうではないのではありませんか。次のように問いを立てることを許していただきたい - 「精神分析も精神療法も、どちらも言葉によってしか作用しない。それにもかかわらず、互いに対立している。どうしてなのか」と。

- 昨今では、「精神分析から着想を得ている」ことを要求されないような精神療法はありません。私はそこに必要な括弧をつけてニュアンスを加えます。両者のあいだにある違いは、マットにダウンする¹⁰こと・・・つまり、寝椅子に横になるかどうかだけでしょうか。

このことは、同じように括弧つきの「協会」のなかでパスがないために困っている分析家たちに道を開くこととなります。この「協会」はパスについてなにも知らうとしないために、階級化という形式によってそれを補っています。このやりかたは自分たちの実践というより、協会内の人間関係においてより腕前を發揮する連中をそこで安定した地位を与えるためのきわめてエレガントな形式です。

この理由で、私は心理療法において何が分析実践を優位に置くのかを示すことにします。

そこでは無意識が関与している限りにおいて、構造、つまり言語は二つの側面を見せます。構造は言語による意味の側面。これは性に關する月並みなことのために、われわれに大量の意味を浴びせる分ものでしかない。析のものだと思われるかもしれない側面です。

- 6 -

この意味が無 - 意味に、つまり性的関係の無 - 意味に帰するというのは驚きですが、この無「性的関係はな
- 意味は愛の言葉においてずっと昔から明白に言われています。それは大声で叫びたくなるほど い」
に明白なので、人間的思考とはさぞ立派なものだという考えを持たせてくれます。

それでもまだ、^{bon sens}良識だとみなされる意味もあり、この良識はおまけに自分自身を常 ^{sens commun}識として
考えています。これは喜劇的なものの極みですが、ただし、喜劇的なものは行為、性的な行為
に含まれている無 - 関係についての知がなければ成立しません。ですから、われわれの尊厳は喜
劇的なものの後を引き継ぐのであり、さらにはそれと交替するのです。

良識は暗示を表し、喜劇は笑いを表します。ということはつまり、両者はほとんど両立しな
いということに加えて、この二つがあれば十分だということの意味するのでしょうか。精神療法
というものは、それが何であれ、まさにここにおいてすぐに行き詰まるのです。というのは、精
神療法が何らかの効果を生まないということではなく、それが最悪 ^{le pire}の事態を招くからです。

そこから無意識というもの、つまり欲望を表明する執拗な主張、もしくは、そこにおいて要 ^{d - > (S < > D)}
請されることの反復が - フロイトが無意識をまさに発見したとき以来、フロイトが言っているの
はこのことではないでしょうか - 、

繰り返すと、そこから無意識というものが - もし、私が言うように、ラングのなかで言語
をつくりあげることによって認められる構造が、無意識を支配しているならばですが - 、

われわれに思い起こさせてくれるのは、パロールにおいてわれわれを魅了する意味の側面に
- それによって、存在が、パルメニデスが思考を想像するもととなるあの存在がパロールを映し
出すスクリーンとなるのですが - 、

- 7 -

繰り返すと、われわれに思い起こさせてくれるのは、結論を言えば、言語の研究は、意味の
側面に記号の側面を対置させる、ということです。

どうして、症状でさえ、分析において症状と呼ばれるものでさえ、そこにおいて進むべき道
を示さなかったのでしょうか。この状況は、ヒステリー患者に従順であったフロイトがやって来
て、夢、言い間違い、さらには機知を、暗号文を解読するように読み始めるまで続いたのです。

- フロイトの言うことはまさにそれであり、それがすべてであるということを証明していた
だきたい。

- これらの三つの項目についてそれぞれ書かれたフロイトのテキストに当たってみれば - それ
らの表題は今ではありきたりなものになっていますが - 、問題になっているのは純粹シニフィ
アンの辞元 [dit-mension¹¹] の解読以外の何でもないことがわかりでしょう。

すなわち、これらの現象を統一するのは、これらが素朴に分節化されているということです。
つまり、分節化されているとは言語化されているという意味で、素朴にというのは、ラングの
用法が単純に受け入れられ、通俗的な論理に従ってということです。

そして、フロイトが実体、つまり彼がリビドーと名づける流体的神話を喚び起こすのは、多
義性や、隠喩、換喩が織りなすもののなかを前進しながらなのです。

しかし、テキストをしっかりと追っていくと、彼が行っているのはひとつの翻訳だというこ
とがわかります。それによると、フロイトが一次過程という用語に想定する享樂は論理の繋がり フロイトの実践
のなかにあるということが証明され、この繋がりにおいて彼は大変巧みにわれわれを導いていく

- 8 -

ので、享樂は文字通り一貫性をもつということがわかります。

遠い昔からストア派の知恵が到達していたことですが、(ラテン語の呼び名をソシュールのように訳すと)シニフィアンをシニフィエから区別するだけで、そこにある外見的な等価現象が捉えられ、この等価現象がフロイトにとってエネルギー論的な装置の姿をとり得たことが理解できます。

そこから言語学が根拠づけられるためには思考的努力を必要とします。そこからとは言語学の対象であるシニフィアンからということですが、シニフィアンをそれ自体として分離すること、それもとりわけ意味から分離することを重要視しないような言語学者はひとりもいません。

私は記号の側面について論じ、そのシニフィアンへの関与を示しました。しかし、シニフィアンのひと揃いはすでにララングのなかに与えられているという点において、シニフィアンは記号と異なっています。

コードについて語ることは、まさに意味を想定するので、適切ではありません。

ララングのシニフィアンのひと揃いは意味の暗号しか提供しません。ひとつひとつの語は、ララングは意味のララングにおいて、文脈に応じて膨大でちぐはぐな意味の広がりを見せ、この意味は、辞書のなかでしばしばその種々雑多な性質が確認されます。

構成された文章のすべての部分についてもやはり同様です。次のような文章がそうです - 「騙されぬ人たちはさまよう / 父の名 [les non-dupes errent¹²]」。今年、私はこの文章を武器とします。

おそらく、そこでは文法はエクリチュールの止めとなっているに違いありませんが、それで

- 9 -

も文法はひとつの現実界を示しているのです。しかしご存じのように、この現実界は、分析においてその疑似的な原動力が浮き出てこないがぎり謎のままにのこります。つまりそれは、パートナーを欺くことしかできないことから、神経症、倒錯、もしくは精神病によって自らを記す現実界なのです。

フロイトが教えてくれるのは、「私は彼を愛さない¹³」という言表が自らの系列において反響することで遙かに広がっていくということです。

たしかに、音素から文にいたるまで、すべてのシニフィアンは暗号化された(個人的な¹⁴、と戦時中のラジオは言っていた)メッセージとして利用され得るからこそ、シニフィアンは対象として取りだされるのであり、また、世界において、語る存在の世界において、なにがしかの< - >、つまりなにがしかの要素、ギリシャ語で言えばストイケイオン [] があるということを作り立たせているのはシニフィアンだということが発見されるのです。

無意識においてフロイトが発見するものについて、私の言うことが正しいかどうかを見るために、先ほどは、彼の著作に当たって確かめるように促すしかできませんでした。そこで言われているのは、識るということは、大昔からよく知られている隠喩というものを招くことになるという理由で(これはユングがうまく利用した、意味の側面です)、知っていることのほぼすべてに性的な意味を与え得るということに気づくのととはまったく別のことです。なぜなら、症状をつくりあげているもの、つまりシニフィアンの結び目をじっさいに解くことを許すのは現実界です。結ぶとか解くはここでは隠喩ではなく、シニフィアンの素材の連鎖を形成することによって、現実的に作られるあれらの結び目としてとるべきものです。

というも、これらの連鎖は意味の連鎖ではなく、意味的享楽 [jouissance¹⁵] のそれで、この言葉についてはシニフィアンの法をなす多義性に従って自由に書き表せばよいでしょう¹⁶。

私は、精神分析によって資格を与えられた救済手段にたいして、通常、混乱に任されているものとは違う射程を与えたと考えます。

III

- 心理学者、心理療法士、精神科医などの精神衛生に従事しているすべての人たち、彼らは底辺できびしさに耐えて、世界中の悲惨を背負っています。では、その間、分析家はなにをしているのですか。

- あなたがおっしゃるように、悲惨を背負うということは、それに抗議するというだけでも、間違いなく、悲惨を条件付けるディスクールのなかにはいるということです。 S 1 S 2 S / a

このことを言うだけで、私はひとつの立場をとることになります。ある人たちはそれを、政治を非難する立場だとみなすでしょう。私にかんしては、そのようなことは誰が言おうと問題外です。

ともかく、あなたの言うような悲惨を背負うことに献身する心理関係の人たちは誰であろうと、抗議ではなく、協力していかなければならないのです。彼らがこのことを知っていようがいまいが、彼らのやっていることはそれなのです。

それは大変に都合のよい話だ、つまり、判断を判断のもとになるものに帰着させるためには、

- 11 -

このディスクールという考え方は大変都合のよい話だ、と、あまりにも容易な反論を自分自身にしてみましょう。驚くことに、じっさい、ひとはそれを主知主義だと言う以外、もっとまともな反論を見いだせないのです。誰が正しいのかということが問題ならば、そのことはたいした意味をなしません。

私はこの悲惨を資本主義のディスクールに結びつけ、資本主義のディスクールを告発するのですから、なおさらそれは意味をなさないのです。

私は、このような告発をまともにやることはできないということを単に指摘しておきます。なぜなら、資本主義のディスクールを告発することは、それに規範を与え、つまり完成させ、結局、それを強化することになるからです。

ここでひとつの注記を加えておきます。私はこのディスクールという概念を無意識の外 - 在 [ex-sistance] によって基盤づけるわけではありません。私がディスクールによって位置づけるのは無意識であって、それは、無意識がディスクールに外 - 在するからです。フロイト的無意識が外 - 在するのは分析のディスクールにたいしてで

あなたはこのことを大変よく理解なさっているので、私が無駄な試みだと認めたこの企画に、精神分析の未来についてのひとつの質問を付け加えたのです。 ールにたいしてでしかない・・・

無意識はヒステリー者のディスクールにおいてしか明確に証明されず、他のいかなるところで無意識は接木されて現れるしかないだけに、なおさら無意識はディスクールに外 - 在するのです。たしかに、いかに驚くべきことのようにみえても、分析家のディスクールにおいてさえ、そこで無意識についてなされているのは、栽培なのです。

ここで、余談をひとつ。無意識は聴かれることを前提とするのでしょうか。私の考えるとこ

- 12 -

るでは、たしかにそうです。しかし、無意識が外 - 在するためのディスクールがなければ、無意識は思考も、計算も、判断もしない知だとして評価されるということは、けっして無意識にとっ
て前提とされないのです。たとえば、思考も、計算も、判断もしないとしても、やはり無意識が(たと
えば夢の中で)作業をすることは変わりませんが、無意識は理想的な労働者だというわけです。
マルクスが、支配者のディスクールを引き継ぐのを見るという希望をもって、資本主義経済の精
華とした、あの理想的な労働者です。それはたしかにやって来たのですが、ただ予想しないよう
なかたちでした。ディスクールにかかわるこのような事柄には予期せぬことがつきものであ
る。
て、まさにそこにこそ無意識の仕業があるのです。

私が分析的と呼ぶディスクールとは、分析実践によって決定される社会的繋がりです。この
ディスクールはわれわれにとって活動し続けているさまざまな繋がりの中で、もっとも基本的な
ものの位置に置かれるに値します。

- しかしながら、分析家の間で社会的繋がりをなしているものから、あなた自身、追い出さ
れたものではありませんか・・・

- <協会>、- 国際精神分析協会と呼ばれるものですが、久しく前からそれは家族的な組織
に成り下がっているのです、この呼び名にはいささか虚構が含まれています -、私はこの<協会>
がまだフロイトの直系の弟子たちの支配下にあった頃から知っています。あえて言わせていた
くなら、- 断っておきますが、私はここでは判事であると同時に当事者でもあるので、偏った判
断しかできません - それは現在では「分析的ディスクールに反対する相互扶助協会」であると言

- 13 -

いたいのです。SAMCDA¹⁷ と呼べるものです。

とんでもないSAMCDAです。

したがって、彼らは、自分たちを条件づけているディスクールについてなにも知らずとはし
ません。しかしながら、そのことは彼らをこのディスクールから追い出すわけではないし、それ
どころか逆に、彼らは分析家として機能しているのです。このことは、彼らを利用して自らを分
析している人たちがいるということを意味します。

したがって、たとえこのディスクールが生む諸効果のいくつかは彼らによって無視されてい
るにしても、彼らはこのディスクールに適っているのです。全体からいって、彼らに慎重さが欠
けているわけではないし、それが真の慎重さではなくとも、良い慎重さであることはできるので
すから。

いずれにせよ、リスクは彼らの方にあるのです。

さて、精神分析家についての話しですが、単刀直入にしましょう。もっとも、どのように話
しても、結局、私が言おうとするところに帰着するでしょうが。

というのも、分析家を客観的に位置づけるのに、聖人である、と昔呼ばれたことによる以上
のものはないと思われるからです。

聖人が生きているあいだは、ときには後光によって彼にもたらされるような畏敬の念を、自
分から起こさせるようなことはしません。

聖人がバルタザール・グラシアン¹⁸の道、すなわち騒ぎを起こさないという道に従えば、だれ
も彼を目にとめません - それで、アムロ・ド・ラ・ウーサーは彼が廷臣について書いているとお

- 14 -

もったのです。

聖人とは、理解して頂くために言うと、慈悲を施しません。むしろ彼は廃棄物となろうとす 具現した対象(a)
る、つまり脱慈悲する [décharite¹⁸] のです。これは構造が課することを実現するため、つまり主
体、無意識の主体が、聖人を自らの欲望の原因としてみなすことができるようにするためになさ
れるのです。

問題になっている主体が、少なくとも構造において自らのいる場所を知る機会を持つのは、
たしかにこの原因のおぞましさによるのです。聖人にとってそれは愉快なものではありませんが、
テレビの前の何人かの人の耳には、このことは聖人の行為の奇妙さとうまく一致するのではない
かと想像します。

それが享樂の効果を持つということですが、享樂されたものに享樂の意味を見いださない者
がいるでしょうか。それに応じないのは聖人だけであって、彼にとってはとんでもないことなの
です。それは聖人の話のなかでも、もっとも驚嘆させるものでさえあります。聖人に近づき、聖
人に関して見誤ることのない人たちを、驚嘆させるのです。すなわち、聖人は享樂の残滓なので
す。

とはいえ、聖人も時には変わることもあります。しかし、それによって他の人々より満足す
るというわけではありません。彼は享樂するのです。その間、彼はもはや聖人としての行動はと
っていません。そうすると、小賢しい連中が彼を見張って、自分自身の力を盛り返すための口実
を見つけようとしないうけではありません。だが、聖人はそのようなことを意に介しないし、ま
た、そこで聖人は報われているのだと考える連中についても、同じように問題にしません。報酬
を期待するなど笑止千万です。

- 15 -

なぜなら配分的正義¹⁹にもやはり意を介しないということは、聖人の出発点であったのです。

実をいうと、聖人は自分に功德があるとは考えません。だからといって、彼が道徳を持って
いないというわけではありません。他の人たちにとって唯一困るのは、そのことが聖人をどこに
運んで行くのかわからないということです。

私といえば、また新たにこのような人たちが現れないかと懸命に考えています。おそらくそ
れは、私自身がそこに到達していないからに違いありません。

聖人となればなるほど、ひとはよく笑います。これが私の原則であり、ひいては資本主義的
ディスクールからの脱却なのですが、 - それが一握りの人たちだけにとってなら、進歩とは
ならないでしょう。

IV

- 先生が、無意識はひとつの言語のように構造化されている、という定式を提案して二十年
になりますが、人はさまざまなかたちで先生に異議を申し立ててきました。こう言うのです - 「そ
こにあるのは単なる言葉だけだ。では、言葉に関係ないものについては、どうするのか。心的エ
ネルギー、あるいは情動とか欲動とはなにか」。

- あなたはいま、SAMCDA のなかで先祖伝来のものを主張しているような口ぶりを真似て
おられます。

- 16 -

なぜなら、ご存じのように、少なくともパリでは SAMCDA において、栄養源になる唯一の要素は私の教育から来ているのですから。私の教育はいたるところから浸透してきます。それは風のようなもので、あまり強く吹くときには北風となり、そうすると、彼らはまた古い習慣を取り戻し、会議で集まって互いにあたため合うのです。

というのも、私が今日このようにテレビで笑いを取るために SAMCDA を持ち出したとしても、ばかにしているのではないからです。フロイトが分析的ディスクールを遺産として残すための組織を考えたのは、まさに会議で集まって互いにあたため合うためだったからです。

彼はその試練が厳しいだろうということを知っていました。彼に最初に従っていた者たちが自分たちの経験からその点について教えてくれていたからです。

- まず、自然エネルギーの問題を取りあげましょう。

- 自然エネルギー、それは、そこでもやはりひとは多様な考えを持っているということを証明する問題のための観測気球となります。エネルギーについて言いますと、そこに自然という札を付けるのはあなたです。というのも、彼らにとってエネルギーは当然自然なもので、ダムが貯めて有用なものにし得るものとして、消費されるためにつくられた何かなのです。ただそれについて、エネルギーが自然なのは、風景のなかでダムが景観をなしているからではありません。

ある「生命力」がそこで消費されるものとなり得るということ、それは粗雑な隠喩です。なぜなら、エネルギーはひとつの実体ではなく、たとえば古くなるにつれて熟成したり、酸っぱくなったりするものではないからです。それは、物理学者の作業を可能にするために、彼らの計算

- 17 -

において見いださなければならない、ひとつの定数なのです。

この作業とは、ガリレオからニュートンにいたるまで純粋に機械的な力学によって培われてきたものに適合するような作業、つまり、多少とも本来的な、厳密に立証可能な物理学と呼ばれるものの中核をなすものに適合するような作業です。

計算の組み合わせでしかないこの定数がなければ、もはや物理学は存在しません。物理学者はこの定数に配慮し、彼らが質量、場、運動量の間での等価性を調整すると、そこからエネルギー保存の法則の原則を満たす数値が引き出せるのだと考えられています。それでもなお、ひとつの物理学が立証可能であるという要請を満足させるために、この原則を立てることができなければなりません。ガリレオが言い表していたように、それは仮想的な経験の一事実なのです。より正確にいうと、体系が数学的に閉じているという条件は、体系が物理学的に分離しているという想定にすら優先するのです。

これは私が考え出したことではありません。どんな物理学者であろうと、エネルギーはひとつの定数の数値でしかないということをはっきりと知っています。つまりつねにそう考えているのです²⁰。

ところで、フロイトが無意識のなかで一次過程として説明するもの - これは私が言うことで、se déchiffre 楽のエネルギーですが、直接原典に当たってみればわかるでしょう -、それは暗号化 / 数値化されるものではなく、se déchiffre 理論を確立する手段はない。解読されるものです。私が言うのは、楽そのものです。その場合、楽はエネルギーとはならず、それ自体としては記録されません。

フロイトが自らの考えを試すための第二局所論の諸図式、たとえば有名なニワトリの卵、は、まったく恥ずべきものであり、分析の材料となるものでしょう。もっとも、〈父親〉というもの

- 18 -

が分析できるならですが。ところが、私は現実的<父親>を分析することは問題外であり、<父親>が想像的なものの場合、ノアのマント²¹を被せた方がよいと考えます。

したがって、私はむしろ科学的ディスクールとヒステリーのディスクールを区別するものについて問いたです。そこで言うておかなければならないのは、フロイトがヒステリーのディスクールにおいて自分の蜜を集めたにしても、彼自身もこのディスクールの一端を担っていたということです。というのも、彼が創造するもの、それは思考も、計算も、判断もしないものとしての蜜蜂の仕事なのです。つまり、まさにここですでに指摘したことなのですが、結局、このこのような蜜蜂の仕事は、フォン・フリッシュ²²がそれについて考えているようなものではおそらくありません。

結論として私は、科学的ディスクールとヒステリーのディスクールはほとんどおなじ構造をもっていると考えます。このことは、フロイトが、自分の死後、科学の未来において無意識を解明してくれるような熱力学が生まれるとの希望をわれわれに暗示するという誤ちをおかしたことを説明してくれます。

四分の三世紀を経た後にも、こうした約束が果たされるごく些細な兆しも姿を現さないと言えます。そして、さらにわれわれは、快感原則と言われても、犬の毛につくダニのように、われわれは魂というものにしがみついているのだということ以外にはなにも証明しないような原則に一次過程を背負わせることによって、フロイトの熱力学のような考えは後退しているとさえ言えるのです。なぜなら、フロイトが快感を説明するために使う、あの有名な最小限の緊張は、アリストレスの倫理学以外の何でもないからです。

それは、エピクロス派が看板にしていたものとおなじ快樂主義ではありえません。現代では

- 19 -

心的活動の意味しかないようなこの看板のおかげで彼らが豚と呼ばれて侮辱されるには、この看板の下に隠さなければならなかった何か大変貴重なもの、ストア派よりも秘密でさえあるものを彼らが持っていたに違いありません。

いずれにせよ、私はニコマコスとエウデモスの倫理学、つまりアリストテレスだけを取りあげるとどめて、そこから厳密に精神分析の倫理を区別したのです。私はこの倫理の道を、丸一年かけて切り拓きました。

私が無視しているとされる情動の問題も、おなじことです。

次の点だけでも誰か答えていただきたい - 情動は、身体に関係するのでしょうか。アドレナリンの分泌は身体的なものでしょうか、そうではないのでしょうか。この分泌が身体の諸機能を混乱させるということは事実です。しかし、いかなる点においてそれは魂なるものからやってくるのでしょうか。それが分泌されるのは思考によってなのです。

そこで熟慮すべきなのは、「無意識はひとつの言語のように構造化されている」という私の考えが、「情動とはよりよい始末をつけるための大きな混乱である」などという考えよりも真剣に情動を認識することができるかということです。なぜなら、ひとが私に対立するのはこの点にあるからです。

私が無意識について言うことは、情動が棚からぼたもちのようにちょうどうまいかたちで口の中に落ちてくるのを待つよりも、一歩進んでいるかどうかということです。この「一致 Aadaequatio²³」は、ここでは「もの rei」を、ものを収容し直す「情動 affectus」に結びつけて、情動をもうひとつのぎっしりとつまっているものに入れ直すことによってより滑稽となっています

- 20 -

²⁴。医者たちがそれを生み出すには、今世紀を待たなければならなかったのです²⁵。

私としては、フロイトが1915年の抑圧についての論文や、そのことに立ち戻っている他の論文のなかで表明していることを再現したにすぎません。それはつまり、情動は移動しているということです。この移動を判断できるのは主体による以外あるでしょうか。この主体とは、こ身体にとって換喩の移動は表象によってなされる以上にうまくそこに成立し得ないということの前提となるものでは常に作用している・・・す。

このことを私はフロイトと同じように捕らえるために、彼の「帯」によって説明します。というのも、私も彼と同じものを問題にしているということを、いずれにせよ認めなければならないからです。ただ、私は、フロイトのフリースとの書簡（唯一出版されている削除版の書簡集に収録されているもの）に助けを求めて次のことを証明しました。つまり、特別に抑圧された上記・・・なぜなら、の表象とは、構造、しかもまさにシニフィアンの公準に結ばれたものとしての構造以外のもので思考の主体は隠喩はないということです。書簡52を参照していただければ、この公準はそこに書かれています。化されているから

私がサンタンヌ病院での最後の一年間、不安を取扱ったことも忘れて、どうして、私は情動だ。を無視しているなどと大げさに言って得意になることができるのでしょうか。

一部の人は、私が不安の位置を定めた図表を知っています。そこでは、心的動揺、行為障害、困惑などがそれ自体として区別されており、このことは私が情動というものを軽視していない十分な証拠です。

たしかに、サンタンヌ病院で私のセミナーを聴くことは、SAMCDA で養成されている分析家にとって禁止されていました。

- 21 -

そのことを私は遺憾にはおもいません。私はこの年、私を囲む人たちを、不安にかかわる対象によって不安を根拠づけるという理論展開に従事させることに成功しました - これは、不安には対象がないなどの主張（心理学者はこの点にとどまり、不安と恐怖の区別をつけるぐらいしかできなかったのです・・・）とはまったく反対です。今では、私は対象 a をむしろ卑しい対象 [abject²⁶] と呼んでいます。この対象によって、繰り返しますが、不安を根拠づけるのです。そのおかげで、私の一派の一人は目眩（抑制された目眩です）をおこし、私をこの対象のように見捨てたのです。

私の「言う行為」から情動を再考察することは、いずれにせよ、情動について言われた確実なことに立ち戻してくれます。

これらの情動は、聖トマスによってより正確に魂の諸情念と呼ばれているものです。プラトン以来の、頭、心臓、さらには彼の言うエピテュミア [μ ²⁷], もしくは超心臓 [surcoeur] などは、身体に応じたこれらの情念の切り取りです。これがすでに証しているのは、単にそれらを切り取るだけであっても、それらを扱うには、私が構造によってしか影響を受けないと言う身体に従わざるを得ないということではないでしょうか。

どのような方向から、この効果において無意識によって優性となるものをシリアスに - シリアスという語にシリーズ²⁸ という意味を込めて - 遂行することができるかを示すことにしましょう。

たとえば悲しみですが、それは、魂とか、哲学者ピエール・ジャネの心理学的緊張がそれを支えるものとして持ち出され、抑鬱と呼ばれます。しかし、それはひとつの心理状態ではなく、

- 22 -

ダンテが表現していた単なる道徳的過ち、さらにはスピノザの言う罪です。つまりそれは、道徳倫理には<善く
l'acheté
的な臆病さを意味しているのであって、最終的に思考によってしか、つまり、善く言う行為とい
- 言う行為>の倫
う義務、あるいは無意識のなか、構造のなかでの自らの位置を知るという義務によってしか位置
理しがなく、
づけられません。

この臆病さが無意識の^{rejet}拒絶となって精神病に向かうことになるだけで、その結果として、言
語から拒絶されたものの現実界への回帰が生じます。それは躁病的興奮であり、この興奮によっ
てこの回帰は致命的なものとなります。

悲しみの対極にあるのが、悦ばしき知 [gay sçavoir] であって、それはひとつの美德です。
美德は誰の罪をゆるすわけでもありません。この罪とは誰もが知るように原罪です。私が悦ばし
き知として示す美德は、まさに罪を許さないことの例です。というのもそれは、自らが何から成
っているかを表明すること、つまりこの美德は、理解したり、意味のなかに突進することではな
く、この美德が意味の鳥もちに捕らえられることなく可能な限り意味の近くを掠めること、そし
味の知しかない。
て、そのために解説を享樂することだからです。このことは、悦ばしき知が最終的にそこから墜
落し、罪へと戻るしかないということの意味します。

このすべてのどこに、^{bon heur}好 運をなすものがあるのでしょうか。まさにあらゆるところにあ
ります。主体は幸^{heureux} 福^{heur} なのです。これは主体の定義ですらあります。なぜなら、主体は運にし
か、換言すれば運命にしか義務を負わないのであって、すべての運は、主体を維持するというこ
(a)との「ラン
デヴー」において

驚くべきは、主体は、自分を幸福へと追いやるもの、つまり構造への自らの依存に気がつか
ずに幸福でいるということではなく、彼が至福という観念を抱き始めるということです。この観

- 23 -

念が大きく膨れあがって、結局主体はそこから追放されているように感じるのです。

幸いなことに、詩人というものがいて、このことについての秘密を明かしてくれます。それ
は、私が名を挙げたばかりのダンテとかその他の詩人ですが、古典主義をだしにしてへそくりを
貯める淫売のような輩は別です。

ひとつのまなざし、ベアトリーチェのそれ、つまりとるに足りないもの、彼女が瞬き、そこ
から生まれる甘美な残滓、つまりここで<他者>が生まれるのです。われわれはこの<他者>を
女の享樂ならば
彼女の享樂としてしか特定してはなりません。それはダンテが満足させることのできない享樂で
す。なぜなら、彼女からはこのまなざし、この対象しか得られないからです。しかし、ダンテは
この享樂について、神がそれを満たすのだと述べています。彼は彼女の口を借りてさえ、われわ
れにその保証を得よと挑発するのです。
外 - 在を得る、

われわれの裡においてそれに応えるのは、倦怠 [ennui] です。この言葉を映画のなかのよ
うに踊らせ、再び一列に並ばせ、私は、unien という言葉を再合成しました。私がそれによっ
て示すのは<他者>の<一者>への同一化です。私が言うのは、神秘的<一者>のことであって、
しかし、<
その喜劇的な他者は、名を挙げればアリストファネスですが、プラトンの『饗宴』のなかで卓越
した役割を果たして、この<一者>のむき出しの等価物を、二つの背を持つ動物としてわれわれ
いに示してくれるのです。彼はこの動物が二分割されたのを、この動物をどうすることもできない
ジュピターのせいにしてしています。それはとても悪いことで、私がすでに言ったように、してはい
けないことです。このような不作法に現実的<父親>を巻き込んではいけません。

それでもやはり、フロイトがそこに落ち込むことはたしかです。なぜなら、「生」の原則と
して、彼がタナトスに対置するものとしてのエロスに負わすのは、結合することで、束の間の反

- 24 -

復される交接 [coïtération³⁰] を除けば、まるで、二つの身体がひとつに結ばれるのを見たことも
ないようです。 いてなにも「すべ
てではない」から

このように、情動は、言語に住まうという特性を持っている身体にやってくるのです - ここ
では私は、自分よりも売れっ子の著者³¹ のスタイルを借用しています。繰り返しますが、情動は、
住まいを、少なくとも自分の好みにあった住まいを見いだすことができずに、身体にやってくる
のです。これは陰鬱さとも、不機嫌とも言われます。これはひとつの罪でしょうか、少し頭がお
かしいのでしょうか、それとも現実界の真の感触なのでしょう。 和であり、・・・

SAMCDA の連中も、情動にうまく調子をつけるのには私の安バイオリンを使えばよかった
のです。ぼんやりと空を見て過ごすよりも、はるかにまともなことになったでしょう。

あなたが欲動というものを、ひとが私のディスクールから身を守るための、あの曖昧な態度
のなかで理解しているということ、それは私をあまりにも過大に評価することになるので、あな
たに感謝することができません。なぜなら、私の十一番目のセミナーを非の打ち所のない文体
で書き写したあなたなら、私の他に誰が欲動について何かを言うという危険を冒すことができ
たかよくご存じのはずだからです。

私ははじめて、とりわけあなたにおいて、反応のない陰鬱な耳とは違う耳によって傾聴され
ていると感じました。つまり私が <一者> を <他者化> しているようには理解しない耳です。し
かし、あなたのような聴衆に出会うことになった場所に私を呼んでくれた人物³² でさえ、そのよ
うな理解へと突進していったのです。

このセミナー十一巻の 6、7、8、9、そして 13、14 章を読んで、Trieb を本能と訳

- 25 -

さないことによって得られるもの、そしてこの欲動を漂流と呼び、子細に検討して、フロイトに
密着しながら、その奇妙さを分解したのち、組み立て直すことによって得られるものを実感しな
いひとがいるでしょうか。 ・・・そして、欲動
は漂流するから
だ。

そこで私についてきて、科学の実験的なものを構成している <一> によって常に確認できる
定量のエネルギーと、たしかに享楽だけれども、自らの永続性を身体諸開口部の縁 - 私はそれに
数学的形式を与えようと思いました - からしか得ない欲動の Drang または衝迫とのあいだにある違
いを感じ取らないひとがいるでしょうか。この永続性は、それぞれの欲動が他の三つの欲動と共
存することによって、それぞれを支える四重の審級からのみ成立するものです。四つ欲動は、性
だけではパートナーを構成するに不十分な人たちにたいして備えなければならない不和に、
潜勢力であることによるのみ、接近を許すのです。 だから、私は、
私にとっておまえ

たしかに、ここでは私は神経症、倒錯、精神病を区別するような四つの欲動の応用はしてい
ません。 は誰であるか言う
ことができないの

それを私は、無意識がもときた道を引き返ししながら進むような迂回路にしか従わないやり方
で、別のところで行いました。ハンス少年の恐怖症について、私はまさしくこのような迂回路だ
という説明を行いました。ハンスはそこでフロイトと父親を引き回したのであり、以後分析家た
ちは迂回路にたいして恐れを抱いているのです。 だ。

V

- 巻ではこんな意見が流れています - 「われわれの享楽の仕方がこんなにも下手なのは、性

- 26 -

に対する禁圧があるからであって、それは第一に家族、第二に社会、とりわけ資本主義に責任があるのだ」と。これはひとつの間です。

- それは、たしかにひとつの間ですが - 私はあなたの質問にたいして語るのですから、間だということしておきます -、この場合は、あなた自身がそれにどのように返答するか知りたいという、あなたの知の欲望によって理解できるであろう問いです。すなわち、この問いが一人の人間からというよりも一つの声から出されているのだとすると、つまり、テレビからやって来るものとしてしか考えられない声、なにも言わないことによって外 - 在しない声、とはいえ、その名のもとに、解釈であるこの返答を私が外 - 在させている声、このような声によって出されているのだとすると、理解できるであろうということなのです。

あからさまにというと、私はすべてに返答を持っているということをあなたは知っているのであり、それによって、あなたはこの問いを私のものだということにしているのですが¹³³、それは、金は金持ちにしか貸さない、という諺どおりであって、正しいのです。 a - > S S2

私が成功したのは、分析的ディスクールによるのだということを知らない者がいるでしょうか。この点で、私は self-made man です。他にも私のような人間はいましたが、現代の話ではありません。

フロイトは、抑圧は禁圧に由来するとは言っていません。つまり（イメージで言うと）、去勢は、おちんちんをいじくっている子供に、「今度やったら本当にそれをちょん切ってしまうよ」、

- 27 -

と脅かすパパからくるものではないのです。

とはいえ、そこから経験へと出発するという考えがフロイトに浮かんだのはまったく自然なことです - この経験とは、分析的ディスクールのなかで定義されるものをいいます。結局、彼が分析的ディスクールのなかで進んでいくにつれて、最初にあるのは抑圧だという考えに傾いていたのです。総体的に言うと、それが第二の局所論の大きな変化です。フロイトが超自我の性格だと言う貪食は構造的なものであって、文明の結果ではありません。それは「文明における居心地の悪さ（症状）」なのです。 原抑圧

ですから、抑圧が禁圧を生み出すのだということから、試練に立ち戻ることが必要なのです。どうして、家族や社会そのものが、抑圧から構築されるべき創造物ではないということがあるのでしょうか。まさにそのとおりなのですが、それは無意識が構造、つまり言語によって外 - 在し、動機づけられることによって可能なのでしょうか。フロイトはこの解決法をまず放棄しようとしなかったため、それに決着をつけるためにオオカミ男の症例に執拗に取り組んだのですが、この男にとっては、それはむしろ彼に悪影響をおよぼすことともなったのです。それでもなお、この失敗、治療例としての失敗は、諸事実の現実的なものを確立するというフロイトの功績に比べると、とるに足らないことのように思えます。

この現実的なものが謎のままに残るとすると、そのことはまさに、分析的ディスクールがそれ自体制度であるということ、分析的ディスクールに帰されるべきなのでしょう。

そうすると、性愛を克服するには科学的計画のほかには頼るものはありません。性科学はまだ計画の段階だからです。フロイトはこの計画に信頼を置いていたと強調しています。しかしそれは彼も根拠のないものだとして認めている信頼であり、このことは彼の倫理について雄弁に物語

- 28 -

っています。

ところで、分析的ディスクールは、新しいものを導入するという約束をしてくます。それも、愛において新しい途方もないことですが、無意識が生まれる場においてそうするのです。なぜなら、無意識の袋小路は、たしかにとりわけ、そしてまず最初に、愛において明らかになるからです。

巷に流布しているこの新しいものをすべての人が知っているわけではありませんが、この新しいものは超transcendant越transcendant的なので誰も目覚めさせることはありません。この超越的という語は、数論においてこの語が表す記号とおなじ意味に、すなわち数学的意味として取らなければなりません。

それゆえ、この新しいものが転 - 移 [trans-fert] という名によって支持されているのは意味のないことではありません。

私の周りの人たちを目覚めさせるために、私はこの転移を「想定的知の主体¹³⁴」によって構築します。そこでは転移という名前では漠然としか把握されないものの説明、解明が得られます。つまり、転移によって、主体を無意識の主体として成立させる知に主体が想定されるということ、そしてまさに分析家に転移されるものがそこにあるということです。つまり、思考も、計算も、判断もしないが、それでもやはり作業効果をもたらすものとしてのあの知が転移されるのです。

このような発見は、それが持っている価値以上のものではありませんが、彼らにとってはせっかくの私の苦労も水の泡です・・・いや、もっとひどいことに、私が彼らに恐ろしいものをおみまいしているかのようなのです。

SAMCDA は全く単純 [simplicitas¹³⁵] であって、大胆ではありません。彼らはこの発見が導いてくれるところへとあえて進もうとはしません。

- 29 -

私もそれなりに骨身を砕いています。私は「分析家は自分自身のみを抛り所にする」と主張します。私は自分の<学派>において「パス」を設置しました。「パス」とは、分析主体に分析家として自任することを決意させるものについての試験です。もっとも、それは誰に強制するものでもありません。白状すれば、それはまだ効果をもたらしていませんが、われわれはそれに取り組んでおり、そのうえ、私の<学派>でそれが始まってまだ日が浅いのです。

私は、私の学派の外で、転移とは発送人への返送などと考えるのをやめることに期待しているわけではありません。転移は、患者に属するものであり、その取り扱いにおける以上に、まずその評価において、われわれに慎重さを要求することによって始めて触れ得るような、ひとつの特異性なのです。ここでは、そうすることで満足していますが、あちらでは、分析家はどこに行くことになるのでしょうか。

私が知っているのは、精神分析的ディスクールは一人だけで支えられるものではないということです。さいわい、私にはついてきてくれる人たちがいます。だから、このディスクールも、それなりの可能性を持っているのです。

ディスクールの
超限性

どのような熱狂も - これもまた分析的ディスクールによって引きおこされるのですが - 、フロイトが『文明のなかの居心地の悪さ』のなかで言及している、性にかげられた呪いについてのディスクールが証明するものを取り除くことはできないでしょう。

性に関する<善く
- 言うこと>の不

私が愛への「神的」接近に関して、倦怠、さらには陰鬱さについて語った以上、どうしてこれらの二つの情動が - 言葉の上で、さらには行動として - 禁圧のない関係を懸命に求めようとする若者たちにおいて表現されるということを見捨てるのでしょうか。あきれたことに、彼らをこ

可能、・・・

- 30 -

のように正当化する分析家は、彼らを冷たくあしらうのです。

もし家族的禁圧の記憶が事実ではなければ、それは作り出すされなければならないでしょう、また間違いなくそうされるでしょう。神話とはそうすることであって、構造から起こるものに叙事詩的形態を与えようとする試みです。

性的な袋小路は、自らが由来する不可能なことを合理化するさまざまな虚構を生みだします。・・・それは構造
私は、これらの虚構が想像されたものだとは言わず、これらの虚構にフロイトと同じくそれらを由来するもので
保証する現実界への誘いを読み取るのです。あって、・・・

家族的秩序は、＜父親＞というものが実の親ではないということ、そして＜母親＞というも・・・エディプス
のは子供にとって女性の上に常に影を落とすものであるということを表示するものでしかありま神話を讀むこと。
せん。あとはすべてそこから生まれるのです。

とはいえ、私は、ある子供にみられるような秩序への嗜好を認めるものではありません。この子供はこう言うのです - 「個人的には（原文通り）、僕は無秩序が大嫌いだ」。秩序というものは、ほんのわずかでもそれがあんなら、それは確立されているのですから、それを評価することは必要はないという特徴をもっています。

この秩序は好^{bon}運^{heur}にも、すでにどこかで起こったことであり、ひとつの自由が芽生えることにさえ不都合だということをしげい証明するのに都合の良い運^{heur}な^{bon}のです。それは秩序を回復した資本主義です。それゆえ、性にとってはゼロからやり直しです。なぜなら、資本主義はそこから、つまり性を厄介払いすることから出発したからです。

あなたは新左翼に走ったことがありますが、私の知るところでは、性的新左翼ではありません

- 31 -

せんでした。というのも、性的新左翼は、現在外 - 在するかたちでは、分析的ディスクールに由来するものでしかないからです。それは、性にかげられた呪いを倍加するだけなので、うまく外 - 在しません。この点において、それは＜善く - 言う行為＞によって位置づけたあの倫理を恐れているのです。

- それは単に、セックスをすることを学ぶには、精神分析からはなにも期待すべきものがないということ認めることではないでしょうか。そうすると、性科学へと希望が向けられるということも理解できます。

- さきほど私が示唆したように、なにも期待すべきものがないのは、むしろ性科学の方です。倒錯のような明白な現象を観察しても、愛においてはなにも新しいものは構築できないことがわかります。

神は、それとは反対に大変うまく外 - 在したので、誰も何もわからないうちに異教徒たちは世界を愛で満たしたのです。われわれが立ち戻るのはそのことです。

よく言うように、^{Dieu}ありがたい^{merci}ことに、たとえば道教がそうですが、われわれものとは違う伝統によると、より思慮分別のある人たちがいたことが保証されます。しかし残念なのは、彼らにとって意味あることであっても、われわれの享樂の関心をそそらないために、われわれにとっては何の意味も持たないということです。

私が言ったように、＜道＞が＜記号＞を通るとしても、驚くにはあたりません。そこで何らかの袋小路が証明されるならば - 証明されることによって確かになるならば、と私ははっきりと

- 32 -

言います - そこには純然たる現実界に触れるチャンスがあるのです。〈道〉のすべての真理を言うことを妨げるものとしての現実界です。

このような考慮がなされた上で始めて、愛の「神的 - 言う - 行為 di-eu-re³⁶」があるのであつて、神は言う行為である。このような考慮のコンプレックスは曲がりくねったものになることによって始めて言い表され得るのです。

- 先生は若者を、先生の言葉で言うと、冷たくあしらうことをしません。それは確かなことで、ある日先生はヴァンセンヌで彼らに「あなた方は革命家として、一人の支配者を希求している。その望みはかなえられるだろう」と、投げつけたのですから。結局、先生は若者のやる気を挫いているのです。

- 当時の風潮として彼らは私を悩ませていました。それをはっきりとした態度で示す必要があったのです。

この態度はまったく正しかったので、以来、彼らは私のセミナーに押しよせてくるほどです。結局、棍棒で叩かれるよりもおとなしいほうを好むのです。

- 他方、先生は人種差別の高まりを予言しておられますが、その確信は何に由来しているのですか。またいったい、なぜそうおっしゃるのですか。

- なぜなら、それは困ったことにおもえるし、それでもなお真実だからです。

- 33 -

われわれの享樂が混迷するなかで、〈他者〉のみが享樂を位置づけることができるのですが、それはわれわれが享樂から分離している限りです。そこから、人種が混ざり合っていなかったころには未聞であったさまざまなファンタスムが生まれます。

この〈他者〉をその固有の享樂の様式に任せておくことは、われわれの様式を〈他者〉に強要しないことや、〈他者〉の様式を低開発などと扱わないことによって始めて可能になることでしょう。

そのうえにわれわれが持つ享樂の様式の不安定性が加わるならば、どうして、われわれの暴挙が身に纏う見せかけの人道主義が続くなど期待できるのでしょうか。われわれの享樂の様式、それはそれ自体もはや別のかたちでは言い表せない剰余享樂によってしか、以後、位置づけられないものです。

神がそこから力を取り戻して、外 - 在することに至ったとしても、神のもたらした不幸な過去の再来以上のなにも予告するものではありません。

VI

- カントの最初の『批判』の〈規範〉によると、彼が「われわれの理性の関心」と呼ぶものは、三つの問いによって要約されます。それは、「私は何を知り得るか」、「私は何をなすべきか」、「私には何を希望することが許されているか」です。これらの表現は、ご存じでしょうが、中世の聖書解釈学から派生してきたもの、正確にはアゴスティノ・デ・ダシエに由来するものです。ルターもこれを引用して、批判しています。私が先生に出す問題は次のものです - 「今度はあな

- 34 -

たがそれに返答するか、もしくは、その問題点を指摘していただきたい。」。

- 「私に耳を傾ける人たち」という表現は、当の耳にとって、そこにあなたの問いが響くと、どれほど私のディスクールはあなたの問いには答えていないかわかるほど、違うアクセントを持っていることが明らかになるはずでしょう。

そのうえ、この耳がこのような効果を生むのは私にたいしてだけであったとしても、この効果はやはり客観的なものでしょう。なぜなら、この効果が私のディスクールから生まれるということは、この耳が、このディスクールはこれらの問を除外するのだ、と聞きとるほど、この耳が対象とするのは私なのだからです。というのも、私がこのディスクールに従うとき、私が頭を悩ましていることを説明してくれるという（私にとっては「たしかに」二次的な）利得が得られるように、事がうまく運ぶからです。私が頭を悩ますのは、私にとってこのディスクールには過大な、このディスクールが受け入れる聴衆によるものです。このことはこの聴衆にたいして、もはやこのことを聞くことはないということをもたらします。

そこには、私のディスクールがもう一つの構造の試練を受けるために、私自身、あなたの言うカントの艦隊の船艇となるように駆りたてるものがあります。

- ではまず、「私はなにを知りうるか」という問いについて。

「私はすでにそれ

- 私のディスクールは何を知りうるかという問いを認めません。なぜなら、このディスクールは無意識の主体として、知っていることを前提とすることから始まるのだからです。 . . .

- 35 -

もちろん、私はニュートンが彼の時代のディスクールにたいして与えた衝撃、そしてそこからカントと彼の思cogitature 索が生まれたということを知らないわけではありません。カントが自分の思索をスエーデンボリに対立させるときは、カントは自分の思索を分析の先駆けとなるような最前線にしていたのでしょ。しかし、ニュートンを手がけるとなると、彼は、ニュートンが哲学の古い考え方の足踏み状態を要約するものだと考え再び旧来の哲学に戻るのです。カントがニュートンのダニエルの書についての注釈から出発していたとしても、無意識の領域を見いだしたかどうかは定かではありません。それは素質の問題です。

この点で、「私は何を知るうるか」という場違いなものにたいして、分析的ディスクールがどう答えるかを打ち明けることにします。返答は次の通りです。

いずれにせよ、言語構造を持たないものはなにも知りることができません。そこから、この限界のなかでどこまで行けるかというのはひとつの論理的問いだということが帰結されます。 . . . というの

このことは、科学的ディスクールが、思考にとって現実界の侵入を証明するものである月面も、「アプリアリ」 着陸を成功させるということによって確認されます。この成功は数学が言語以外の装置を持つこととは言語で、 . . . となしになされたのです。ニュートンの時代の人たちが動揺を隠せなかったのはそのせいです。 .
彼らはいかにひとつひとつの質量が他のものとの距離を知っているのかと問うのでした。それにたいしてニュートンは、「それは神が知っている」、そして必要なことを行う、と答えるのです。

政治的ディスクールが - これは注目すべきです - 変化を被ろうとしているときに、現実的なものの到来である月面着陸がなされたのですが、それでも、新聞を通して各自の中に住まわっている哲学者は、それによって漠然としか心を動かされなかったのです。

- 36 -

現在の問題は、ラングを、^{chiffre}暗号ではなく、^{déchiffrer}解読すべき記号にするものから、「構造 - の - 現実的なもの」が抜け出ることをたすけてくれるのは何によるのかということです。

カント以後、無意識の諸事実が発見され、あたかもこれらの事実の「回帰」がすでに論理学を引きおこしているかのように、数学から論理学が発達したのだということを除外してはじめて、私の返答は、結局、カントを繰り返しているといえるのです。彼の著作の有名な標題にもかかわらず、実際、どの批判も古典論理学の評価に手をつけておらず、この点において、カントは単に・・・クラスの
おのれの無意識の犠牲になっているだけだということを証言しています。この無意識は思考しな
論理ではないから
いために、自らが盲目に生みだす作業において判断も計算もできないのでしょう。だ。

無意識の主体の方は、身体と連動しています。私は、この主体はディスクール、つまり技巧が具体的なものにするものによってしか、真に位置づけられないということに立ち戻らなければならないのでしょうか。まったくそうなのです！

そこから、われわれにとって無意識のなかで外 - 在するけれども、ひとつのディスクールの見せかけではない
みが表現するような知について何が言えるのでしょうか。このディスクールを通しておのれの現実
ようなディスクールの
的なものがわれわれにやってくるようなことについて何が言えるのでしょうか。私の文脈のなか
ルはない。
では、あなたの問いはこのように翻訳されます。つまりこの問いは狂っているように見えます。
す。

それにもかかわらず、この問いをあえてそのまま出す必要があります。そうすると、確立された経験に従うならば、この問いを支えるために証明されるべき命題がどのように生まれ得るか

- 37 -

を述べることができるのです。そうしてみましょう。

たとえば、<男> [L'homme³⁷] が<女> [La femme] を欲するとしても、彼は倒錯の場に陥ることによってしか彼女に達することはできない、と行うことができるでしょうか。これは精神分析的ディスクールによって確立された経験から表明されることです。それが立証されれば、
マテーム
それは万人に教え得ること、つまり科学的なことでしょうか。なぜなら、科学はこの公準から出発して道を切り拓いてきたからです。

私が言うのは、それはたしかに万人に教えうるということです。それも、<女> は外 - 在しないのだから、ルナンが「科学の未来」のために願ったように、それは何ら重大な帰結をもたら
<女>
さないだけになおさらなのです。しかし、<女> が外 - 在しないといても、<女> が欲望の対象とならないわけではありません。いや、まったく逆であって、そこから結果が生じるのです。

そのおかげで、<男> は、間違っ、ひとりりの女に出会い、その女とともにあらゆることが起きるのです。つまり、通常、性的行為の成功となるあの失敗が起きるのです。演劇を見ればわかるように、役者はそれについて最高の演技をすることができます。

高尚劇、悲劇、喜劇、滑稽劇（と、ガウス曲線で描けるほどある劇の数々）。要するに、この失敗が姿を見せる舞台 - 恋愛問題をすべての社会的関係から切り離す舞台 - が生みだすものの幅の広さ、けっきょくそれが実現するのです。つまり、パロールの存在たちが、理由もなく自分たちが「生」と名づけるものにおいて存続するための手段であるファンタスムを生みだして、この幅の広さを実現するのです。なぜなら、「生」については、彼らは動物的なものを通してしかその観念を持っておらず、動物的なものにおいて、彼らの知は何の役にも立たないからです。

劇作家詩人がはっきりと気づいているように、パロールの存在たちの固有の生がひとつの夢

- 38 -

ではないということを証言する [tu-émoigne³⁸] ものは何もありません。ただし、彼らは親しい仲間 [tu-é-à-toi³⁹] であるあれらの動物たちさえも殺す [tu-ent⁴⁰] のです。まさにここでは私の愛しい女 [mie(nne)⁴¹] であることで私の恋人 [amie⁴²] であるララングの中でこのような表現をすることがぴったりです。 「 Tu es... 」

なぜなら、最終的に、友愛、むしろ（私が距離を置いて軽視しているわけではない）アリストテレスの友愛 [フィリア] は、まさにそれを通してこの愛の劇が、愛するという動詞の活用の中に、家の掟や経済へと身を捧げる結果生じるすべてのものを伴って、陥るものだからです。

周知の通り、ひとは住みます。どこに住むのかを知らなくても、やはりその習慣 [habite] を持っています。アリストテレスの言う習慣 [エトス] は、夫婦関係がそれとは関係ないのとおなじく、倫理とは関係ありません。彼は習慣と倫理の同音異義に注目しましたが、区別するには至りませんでした。

これらすべての軸となる対象、住居 [エトス] ではなく習慣 [エトス⁴³]、名を挙げれば対象 a、に気づかず、このことに関して科学を確立することができるのでしょうか。

たしかに、< 科学 > [La science]、唯一まだ外 - 在している科学である < 物理学 > [La physique]、が数と証明のなかで見いだしたマテームにこの対象を一致させる作業が残っているでしょう。しかしながら、この対象が構造によって位置づけすべきあのマテームの産物であり、少しでもこの構造が担保 / 言語 [l'en-gage⁴⁴]、無意識が無言でもたらず担保 / 言語であるならば、どうしてそれは、私が言ったあの対象において、自分にもっとぴったりとあったものを見いださ

- 39 -

ないのでしょうか。

このことを納得していただくためには、それについてすでに『メノン』が与える手がかり、つまり個別なものの真理への参与があるということに立ち戻らなければならないのでしょうか。

ひとつのディスクールによって確立されるあのいくつかの道を組織立てることによってこそ、たとえこのディスクールがひとつひとつのもの、個別のものからしか生じないとしても、このディスクールが数的マテームと同様に確実に伝達する、ひとつの新しいものが考えられるのです。

そこにおいては、どこかで性的関係が書かれなことが止むだけで⁴⁵、（いわば）偶然性が愛成立するだけで、性的関係が不可能であると証明することによって、つまりこの関係を現実界に設定することによって終わるはずのものから、ひとつの糸口が獲得されるのです。

この可能性そのものは、ひとつの公理系、つまり偶然性の論理学によって予測することができます。偶然性の論理学にわれわれを慣れさせるのは、マテームまたはマテームが数学者だと決める者が必要性を感じたもの、つまりいかなる明証性に訴えることも放棄するということです。

このように、われわれは、< 他者 > から、つまり性が具体化する無 - 関係が呼び起こす根源的な < 他者 > から出発して進むのでしょうか、 - おそらく < - > があるのは「非性化された [(a) sexué⁴⁶]」の経験によるものでしかないということにそこで気がつくと同時にそうするのです。

われわれにとって、< 他者 > は、< - > と同様に、ひとつの公理を主体にする権利を持っています。ここで経験が示唆してくれるのは次の通りです。まず、女性たちにとって避けられないのは、アリストテレスが普遍に付けることを拒否する否定、つまり非全体、μ、です。それはまるで、アリストテレスが普遍から否定を取り去ることで、普遍を単にとるに足ら

~ A x f x

- 40 -

ないものにするだけではないようにみえます。つまり、全体が無かという原則 [dictus de omni et nullo]はいかなる外 - 在も保証せず、それは、彼自身この外 - 在を、本来の意味で、理解すること⁴⁷なしに、つまりなぜかを知らずに、個別なものについてしか認めないことでも証言しているとおりなのです。なぜかを知らずにとは、無意識ということです。

それだからこそ、一人の女は - というのも、一人以上の女については語れないのですから - 、 ~Ex・~ Fx
一人の女は精神病においてしか <男> に出会わないのです。

次のような公理を提起しましょう。それは、<女>の場合とは違って、<男>は外 - 在し
いではなく、一人の女性は自らに<男>を与えることを禁ずるといふものです。というのもそれ
は、<他者>が在るからではなく、私が言うように、「<他者>の<他者>はない」からです。 S(A)

この理由で、女たちが欲望するものの普遍的なものは狂気なのであって、よく言われるよう
に、すべての女は狂っているのです。だからこそ女たちは全体ではないのです。つまり「まったく - 狂っていない [pas folles-du-tout⁴⁸]」なのであって、むしろ協動的で、ひとりひとりの女性が一人の男にたいしてする譲歩には、自らの身体、魂、財産と、きりがいいほどなのです。

責任を負うことがより困難な自らのファンタスムにたいして、自分ではどうすることもできないことから、彼女達はそうするのです。

女はむしろ、私が<男>のものだと考える倒錯にたいして、迎合的です。このことは、女を例の仮^{mascarade}装へと向かわせませ、この仮装は、恩知らずな連中が<男>に密着して彼女を責める
ような虚偽ではありません。それは、<男>のファンタスムが、女性の裡におのれの真理の時を見いだすために準備するといふ、万一を見込むことなのです。これは法外なことではありません。 S<a>
なぜなら、真理はすべてではない、いずれにせよすべて言われるべきではないということから、

- 41 -

真理はすでに女なのですから。

しかし、この点において真理は、行為に、行為が果たすことができない性的な態度^{sexualité}を要求して、いつも以上に自らを与えること拒むのです。それは失敗で、楽譜のようにすでにすっかり決められていることなのです。

これは変なことですが、そのままにしておきましょう。しかし、フヌイヤール氏の有名な原則⁴⁹は信頼できず、まさに女性のためにあるのは「境界を越えても限界はある」なのだということ
を忘れるべきではありません。

それゆえに、ほかの場所と同様に、愛についても重要なのは意味ではなく、まさに記号^{drame}なのです。ここにこそ、悲劇のすべてがあります。

そして、愛は、精神分析のディスクールによって翻訳されることで、他の場所と同様に逃げていくのだと言われることはないでしょう。

とはいえ、まさにここから、人間の世界に現実界が登場するのはあの自然の無意味^{insensé}によるのだ、ということが証明されます - つまり、月面着陸した<男> [L'homme]を無意味によって追
いつめる、科学も政治もすべて含む、諸々の推移です。しかし、上のことからこの証明の間には性的関係はない」
距離があります。

というのも、そこには現実界のひとつの全体があると想定しなければならないからです。このことはまず証明しなければならないでしょう。なぜなら、ひとは理性的なものにしか、なんらかの主体を想定することは決してないからです。「我は仮説を立てず [Hypoteses non fingo⁵⁰]」とは、外 - 在するのはディスクールのみであるということの意味します。

- 42 -

- 私は何をすべきか。

- 私は誰もがするように、この問いを、自分自身に向けて問い直すしかできません。そして、返答は簡単です。それは、私がやっていることで、私がすでに強調した、<善く - 言う行為>の倫理を、私の実践から引き出すことです。

別のディスクールにおいてもこの倫理が成功すると考えるなら、それを手本にすればよいでしょう。

しかし、それは疑問であるように思われます。というのも、倫理はディスクールに相関的だからです。これ以上くどくど言うのはやめましょう。

格率は、その適用が普遍性を持つかという試練にかけられるべきだという、格率についてのカント的観念は、現実界が、一面でしか捉えられないことにより逃げ出すときのしかめ面がありません。

これは、<他者>への無 - 関係を文字通りにとることで満足するとき、この無 - 関係に責任を持つことにたいして嘲笑することです。 欲望を失った者の
みが「何をなすべ

要するに、これは独身者の倫理であって、われわれに近いところでは、モンテルラン^{*51}のよきか」と問いかける。
うな人間が体現した倫理です。

友人のクロード・レヴィ=ストロースがアカデミーの入会演説において彼の例をとりあげてことを望みます。なぜなら、アカデミー会員は、自らの地位の名誉を高めるには真理をくすぐるだけでよいという好運に恵まれているからです。

- 43 -

あなたの配慮のおかげで、私自身もそこに達していることは明白です。

- 皮肉がおじょうずです。しかし、先生が質問に答えるというこのアカデミー会員の行為を拒否しなかったということは、先生もそれによってくすぐられたからでしょう。そのことは証明できます。なぜなら先生は第三番目の問いにお答えになるからです。

- 「私には何を希望することが許されているか」という問いについて、私はそれをあなたに投げ返します。つまり今度は、この問いがあなたから出されるように聞くのです。私が、自分自身にたいして出す問いには、先ほど返答しました。

何を希望するかを私に言わなくて、どうしてこの問いが私に関わることができるでしょうか。希望には対象がないとお考えですか。

私が何らかのあなたとして扱うようなすべての他者と同じあなた、ゆえに、私が返答するのはこのあなたにですが、あなたの好きなものを希望すればよいのです。

ただひとつだけ知っておいていただきたいのは、私は、希望、つまり幸福な未来というものが、私があなたと同じように尊敬を払っていた人たちを、いとも簡単に自殺に向かわせたのを何度も見てきたということです。

それは別段不思議ではありません。自殺は失敗することなしに成功する唯一の行為なのです。それについて誰も何も知らないのは、自殺が何も知りたくないという意志決定から起こるからです。再びモンテルランの話になりましたが、クロードがいなければ、彼のことは考えにも及ばなかったでしょう。

- 44 -

カントの問いが意味を持つために、私はそれを「どこからあなたは希望するのか」というかたちに変えましょう。このかたちにおいて、あなたは分析的ディスクールが何をあなたに約束するかを知りたいのでしょうか。あなたに、というのは、私にとってそれはかんたなことですから。

精神分析は、無意識の主体としてあるあなたに、この無意識を解明することを間違いなく期待させてくれるでしょう。しかし、皆さんもご存じのように、私は誰にも精神分析を勧めません。おまえは無意識が
おまえを導く運命
おのれの欲望が確実ではないような誰にも勧めないのです。 について何も知り

それ以上に、育ちの悪い連中としてのおまえたちについて話すことを許していただきたいの ^{les vous} たくないのか。
canaille
ですが、私が思うに、精神分析のディスクールは悪党にたいして拒絶すべきです。フロイトがいわゆる文化的基準というものの下に隠していたのはこのことであるに違いありません。残念ながら、倫理的規準もそれ以上に確実なものではありません。いずれにせよ、悪党が判断されるのは別のディスクールによるものです。私が精神分析は悪党には拒絶すべきだとあえて言うのは、分析によって悪党は愚か者になるからです。このことは、それでもひとつの向上には違いありませんが、あなたの言葉を拝借すれば、希望がないのです。

いずれにせよ、分析的ディスクールはあらかじめ転移のなかにはいっていないようなあなたというものを、^{le vous} - 無意識の症状的な現れのひとつである - 想定的知の主体へのあの関係を示すことによって除外します。

それに加えて、私はそこに数学的な接近を選別できるような才能を、もしそのようなものがあればですが、要求するでしょう。しかし、おそらくこのディスクールからは私のマテーム以外のマテームはなにも生まれていないということから、事実として、マテームの試練によって識別

- 45 -

されるような才能は未だないのです。

そこから外 - 在するような唯一のチャンスは好運にしかかかっていません。この点について、私が言いたいのは、希望はそこでは何の役にも立たないということで、これだけで充分、希望はとるに足らないもの、つまり許されないものとなります。

- VII

- ボワローが韻文で次のように表す真理を見て、先生はどうお考えになりますか - 「よく理解していることは、明瞭に言い表せる¹⁵²」。先生の文体などについて述べていただきたい。

- 即座にお答えしましょう。十年もあれば私の書くことは誰にでも明瞭になることでしょう。私は自分の学位論文でそのことが分かりましたが、そこではまだ私の文体は純粋な結晶を見せていませんでした。結局それは経験的事実なのです。とはいっても、私はあなたがたをいつまでも待たせるつもりはありません。 ^{langue}の結晶を
うまく作用させる

私は「よく言い表されたことは、明瞭に理解される」と訂正します - 明瞭にとは、成功する ^{bien} 者から・・・
ということです。このような成功の約束、少なくとも販売の成功の約束は、ひとつの倫理が厳密であるためには絶望的でさえあります。

このことは、フロイトがわれわれに注意をうながす、罪責感を生みだすのは悪ではなく、善 ^{le bien} なのだ、ということを支え続ける神経症者が払う代価を実感させてくれるでしょう。

この状況のなかでは自分自身の置かれている位置を知るには、少なくとも去勢とは何を意味

- 46 -

するかについて疑念を持たずにはられません。そしてこのことは、ひとが思い違いをするよう・・・ガチョウに、つまり信じ込むように、ボワローが「明瞭に」広がるままにしていた噂話⁵³ について明らか
は常に性器をかじりとる。
にしてくれます。

おのれの有名な黄土o c r eのなかに住みついている悪口m é d i t - 「凡庸 [médit-ocre⁵⁴] と最悪のあいだには段階がない⁵⁵」、これがこの言葉をユーモアたっぷりに描くこの韻文作家のものだとは考えにくいことです。

これらすべては簡単なことですが、姿を現すものにたいして、私が重い足で修正することを、それ本来のものとして聞くことがよりふさわしいのです。それ本来のものとは、誰にも気づかれない機知なのです。

われわれは、機知とは計算された言い間違い、手作業で無意識を獲得するものであることを知らないのでしょうか。そのことはフロイトの機知に関する主張のなかに書かれています。

そして、無意識が、思考も、計算もせず、云々ということであれば、機知とは計算された言い間違いだということはますます考えやすくなります。

何を知り得るかの例において私が変調して楽しんだことを再び聞けば、もしそれが可能なら、無意識の現場をひとは押さえるでしょう。さらにうまく言えば、ララングの好運を利用するというより、言語におけるララングの交配を追うことによってそうするでしょう。

私がこれに気づくためには、一押しされることさえ必要でした。そして、そこにこそ解釈の場所の精粋が証明されるのです。

裏返しにされた手袋を前にして、手は自分がすることを知っていたと想定すること、それは、手袋を、ラ・フォンテーヌやラシーヌが耐えていたsupportaient⁵⁶ であろう誰かに、まさにそれを返還するこ

- 47 -

とです。

解釈interprétationはあいだで待機しているもの [*entrepôt*⁵⁷] を満足させるために素早くなければなら
ない。

純粋な喪失p e r t e p u r eによって永続するものから、父親p è r eから最悪のものへとしが賭けないものへのあい
だp i r eで⁵⁸ (-)

*1 本テキストが刊行されたときには冒頭に次のような注意書きがつけられていた。「1. フランス国営放送の番組研究所は < ジャック・ラカンについての番組 > を望んでいた。出されたのはここに公表されたテキストのみである。放送は二回に分けられ、『精神分析』という題が付けられて、一月末に予定。ディレクターはブノワ・ジャコ。2. 私は返答者に、彼が言ったことから私が聞き取ったことを篩にかけてくれるように要請した。篩に残った純粋成分を、枠外に、手引き [*manuctio*] のかたちで加えた。 - J.=A.ミレール、1973年クリスマス」(2000年)

*2 訳注：errement は複数形で使われ「悪い癖」などの意味があるが、ここでは単数形である。間違い erreur さまよう errer さまようこと errement というような繋がりからこれを使っているのであろう。

*3 訳注：Lacan の名前に掛けている。

*4 訳注：「人間 homme」と「飼い慣らされた domestique」を併せて作ったネオロジスム。

*5 訳注：言語学 linguistique の語尾を、軽蔑を表す erie に変えている。ラカン自身もこのころには自分の使う言語学を linguisterie だとして自嘲している。

*6 訳注：冠詞付きの言語 la langue をひとつのものにくっつけたネオロジスム。訳注187参照。

*7 訳注：アリストテレスの「実体 μ 」は下に置かれるものという意味で、ラカンは主体と結びつけている。

*8 訳注：「実在 existence」を「外に」を意味する ex とラテン語で「動かずにいる stare」に由来する「置く

- 49 -

sistere」の名詞形をつけて ex-sistence と表している。これには「外 - 在」という訳語を当てる。

*9 訳注：ユクスキュル、ドイツの動物学者・比較心理学者。主体としての動物が知覚し作用する環境の総体が、それぞれの動物の世界をなすという学説を提唱。「環境世界 Umwelt」と「内世界 Innenwelt」の概念で有名。主著「理論生物学」。(1864 ~ 1944)

*10 訳注：ボクシングでダウンすることを絨毯へ行く aller au tapis と言い、それと寝椅子に行くこと aller au divan とを掛けている。

*11 訳注：訳注346参照。

*12 訳注：「騙されぬ人たちはさまよう les non-dupes errent」という文章は、複数形を表す s を発音しなければ「父の名 les noms du pere」と同じ発音である。

*13 訳注：フロイトのシュレーパー症例の中で、彼の妄想を説明する言表。この言表が文法的に変化を与えられて系列を成している。

*14 訳注：第二次世界大戦においてレジスタンスのメッセージを送る際に個人的なメッセージとされたことを指すのであろう。

*15 訳注：享樂の一種で意味から得られる享樂。発音上は享樂 jouissance と同じである。

*16 訳注：jouissance でも joui-sens でもよいということ。

*17 訳注：分析的ディスクールに反対する相互扶助協会、Société d'Assistance Mutuelle Contre le Discours Analytique の頭文字である。

*18 訳注：「廃棄物 déchet」と「慈悲 charité」をくっつけて作ったネオロジスム。

*19 訳注：利益、富、報酬などをそれらに値するものに応じて正しく配分するという正義。

- *20 訳注：原文は：prête à se dire、だが：prêt à se dire の間違いのように思えるので後者で訳出した。
- *21 訳注：『創世記』、第九章
- *22
- *23 訳注：「うまいかたちで」と訳した *adequat* はラテン語で「一致 *Adequatio*」に相当する。
- *24 訳注：この一節はおそらく聖トマスの有名な真理の定義：*adaequatio rei et intellectus*、「もの」と知性の一致、が念頭にあり、それを「もうひとつのぎっしりつまったもの」とよんでいるのであろう。「もの」と情動の一致というものはいっそう滑稽であるということであろう。
- *25 訳注：現代医学は化学物質で情動をコントロールしようとしている。これは「情動と「もの」の一致」という考えだが、このことをいうのであろうか。
- *26 訳注：「対象 *objet*」と対象 (*a*) の *a* を併せて *abjet* としている。対象 (*a*) は廃棄物的な物であるので「卑しい *abject*」と言うこともできる。
- *27 訳注：欲望
- *28 訳注：ラカンは、「シリアス *sérieuse*」なものは「シリーズ的 *sérielle*」なものだと言っている。つまりシリアスとはずっと続けて追求されるもの、一旦始められたら続けられるものだということで、このくだりはそのことが考慮されている。
- *29 訳注：*heureux* は幸福という意味と、元来は運を意味する *heur* に形容詞語尾を *eux* をつけた物として、いわば「運的な」のような意味を加味させているように思える。
- *30 訳注：「交接 *coït*」と「反復 *itération*」を併せて作ったネオロジスム。
- *31 訳注：ハイデガーのことが。

- 51 -

- *32 訳注：アルチュセールのことが。
- *33 訳注：この一節は、原文では *vous me prêtez la question* であり、「あなたは私にこの問いを貸与する」と訳すこともできる。ここから次に来る、金を貸すことと結びつくのである。
- *34 訳注：訳注 1 参照。
- *35 訳注：英訳によると *SAMCDA simplicitas* は *sancta simplicitas*(まったく単純な人間)に掛けている。
- *36 訳注：「言う *dire*」と「神 *dieu*」を併せたネオロジスム。言う行為には何か神的なものが含まれているということ。
- *37 訳注：この場合定冠詞が大文字なので男 <なるもの> とすべきであろうが、煩雑なので <男> とする。次の *La femme* とか、その他の定冠詞が大文字である場合も同様にする。
- *38 訳注：「証言する *témoigner*」、「殺す *tuer*」、「おまえ *tu*」を併せたネオロジスム。この *tu* は想像的な二項関係、殺人的関係をあらわすものである。
- *39 訳注：「おまえ俺の関係 *à tu et à toi*」と「殺す *tuer*」を併せて作っている。*tu-é-à-toi* は *tu-es-à-toi* ともとれ、「おまえはおまえのもの」という意味。
- *40 訳注：「殺す *tuer*」の三人称複数形に「おまえ *tu*」を重ねている。
- *41 訳注：*mie* は愛する女、*mienne* は私のものという意味である。
- *42 訳注：*amie* は女友達という意味だが、愛人、恋人という意味にもよく使われる。
- *43 訳注：この二つのギリシャ語はほとんど発音が同じ。

- 52 -

- *44 訳注：「言語 langage」と「担保として en gage」という表現を掛けている。
- *45 訳注：ラカンによる様相論理学では、書かれないことが止むとは偶然性であり、それは愛であるとされる。
- *46 訳注：「性化される sexué」に対象(a)をつけたものとする、「性化された(a)」とも読める。
- *47 訳注：s'en rendre compte はイディオムとして理解するという意味を持っているが、字面通りにとると、「自らにそれについての精算を戻す」または「自らにそれを説明する」となる。このことを本来的な意味と言っているのであろうか。
- *48 訳注：これは「全体にたいして狂気を持っているわけではない」とも訳せる。
- *49 訳注：境界を越えると限界がなくなる。
- *50 訳注：ニュートンの言葉。科学的現象の背後に何らかの意味を見いだすことをやめるということ。たとえば、なぜ重力はあるかなどの神によって説明する以外ないような問である。
- *51 訳注：モンテルランは女性を相手にすることなく、独身で通し、最後には自殺した。アカデミー・フランセーズ会員。彼の後にレヴィ・ストロースが会員に選出された。
- *52 訳注：Nicolas Boileau、『L'art poétique』の一節。
- *53 訳注：ボワローは雄のガチョウに性器をかじられて不能であったというもの。
- *54 訳注：「悪口 médit」と「黄土 ocre」を合わせて「凡庸 médi-ocre」という言葉遊びを作っている。
- *55 訳注：Nicolas Boileau、同上。正確には「 Il n'est point de degrés du médiocre au pire」である。
- *56 訳注：supporter は耐えると支えるの両方の意味がある。
- *57 訳注：「～のあいだで entre」と「準備できている prêt」を併せたネオロジスム。interprétationとも掛けている。
- *58 訳注：ここには p がつく言葉による一連の言葉遊びが見られるが、その意味は右にある手引きにあるマター

ムが表している。純粋な喪失とは(-)であらわされる去勢のことで、父親から最悪のものへというのはラカンの精神分析は父親の概念の上に立つものではなく対象(a)の方の選択をするのだということであろう。